

## 令和元年度「熊本市立小中学校心のアンケート」調査結果

熊本市教育委員会事務局 学校教育部 総合支援課

### 1 目的

熊本市立小中学校の児童生徒を対象にして、無記名のアンケート調査を実施することにより、各学校が児童生徒の思いに寄り添い、いじめの実態を把握するとともに迅速・適切な対応を行い、すべての児童生徒が安心して楽しく過ごせるいじめのない学校づくりに取り組むための資料とする。

また、認知された事例をもとに各学校、教育委員会におけるいじめの未然防止、根絶に向けた具体的な対応策を検討・実施する資料とする。

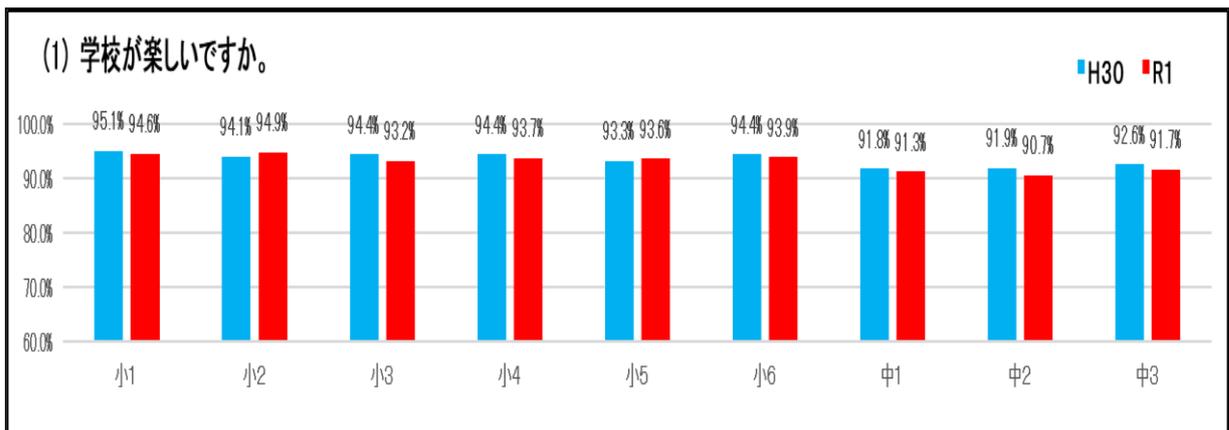
2 調査期間 令和元年11月25日～12月末日（提出日：令和2年2月14日）

3 調査対象 熊本市立小中学校のすべての児童生徒  
（小学生 40350人、中学生 18094人、合計 58444人）

### 4 調査結果と考察

#### 問1 今の気持ちについての質問

##### (1) 学校が楽しいですか。

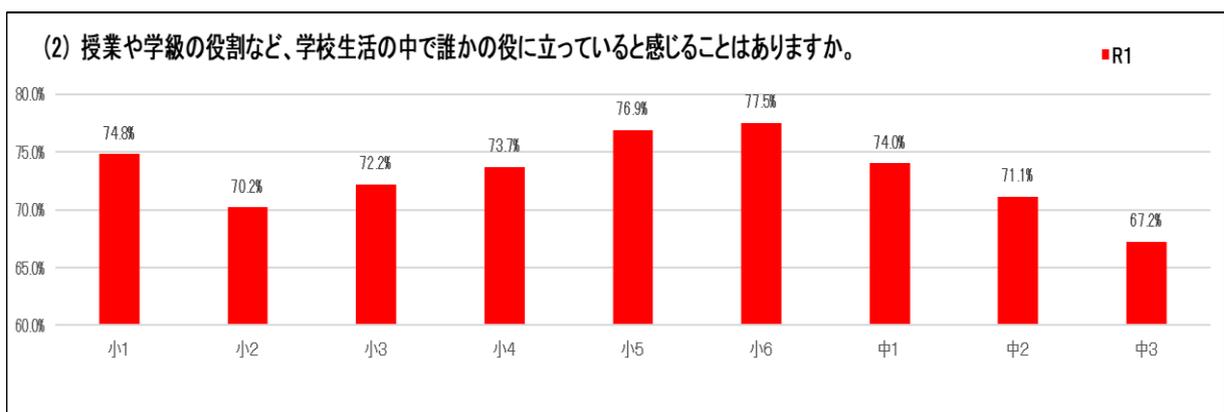


「楽しい」、「まあまあ楽しい」と回答した児童生徒は、小学校が94%以上、中学校91%以上と割合が高く、どの学年も昨年度とほぼ変わっていない。

多くの児童生徒にとって学校は楽しい場所となっている。しかし、楽しくないと感じている児童生徒が1割弱おり、その理由としては人間関係や学習面等が考えられる。

##### (2) 授業や学級の役割など、学校の中で誰かの役に立っていると感じることはありますか。

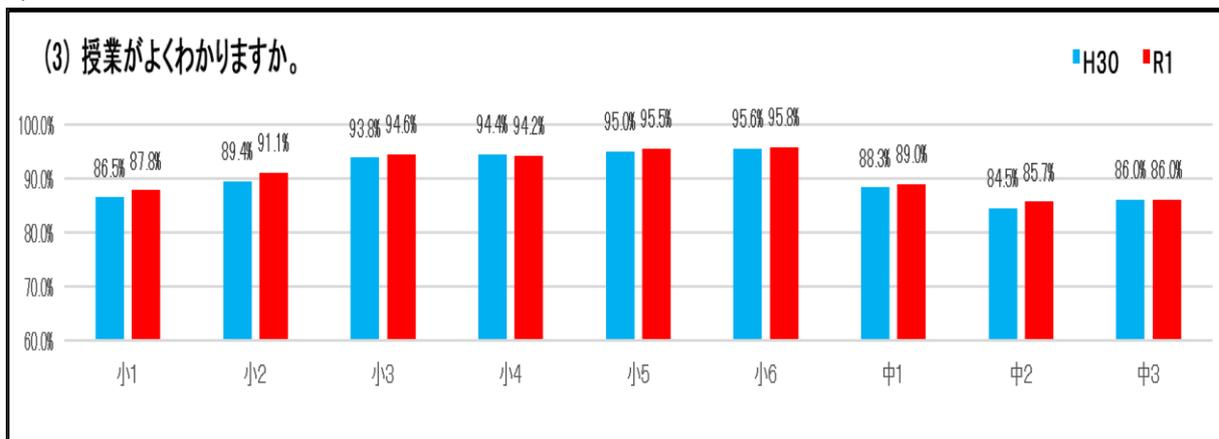
<新規質問>



誰かの役に立っていると感じている児童生徒の割合は、小学校が74%以上、中学校が70%以上で、小学校は学年に上がるにつれて割合が高く、中学校は逆に低くなっていく。

小学校は、学年が上がるにつれて自分でできることが多くなり、高学年になると委員会活動などで学校の代表としての役割を担うようになるため、役に立っているという実感が高まると思われる。しかし、中学校では、中2から学校行事や生徒会・部活動等において、リーダーとしての役割を担う場面は増えるが、生徒自身の成就感にはあまりつながっていないと考えられる。

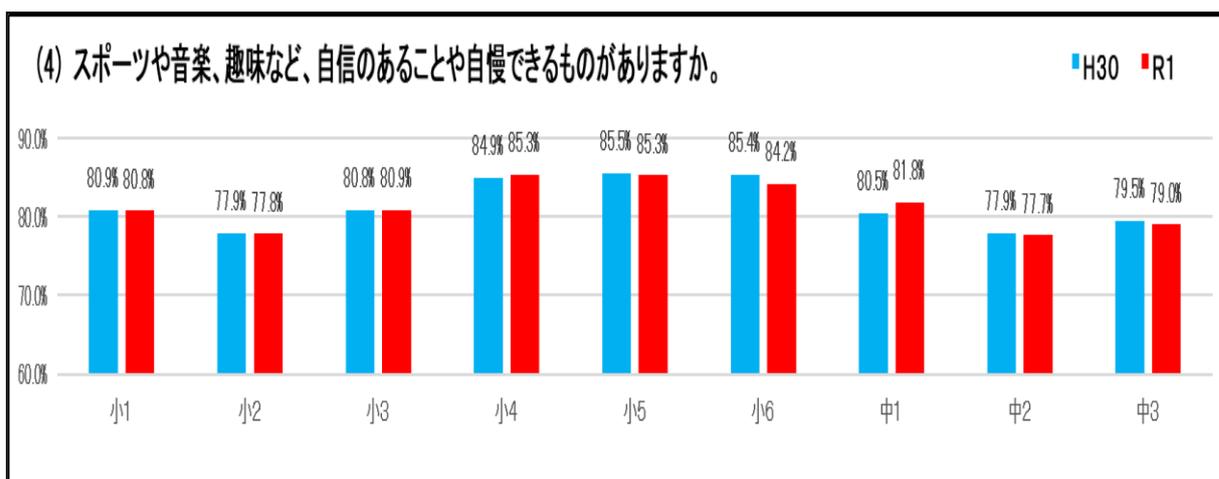
### (3) 授業がよくわかりますか。



「よくわかる」、「まあまあわかる」と回答した児童生徒の割合は、全体で91.2%となっており、どの学年も微増している。

小学校は、学年が上がるにつれて割合が高くなっており、中学校では、中学2、3年生で割合が低くなっている。中学校では、学年が上がるにつれて学習内容が難しくなるため割合が低くなると考えられる。

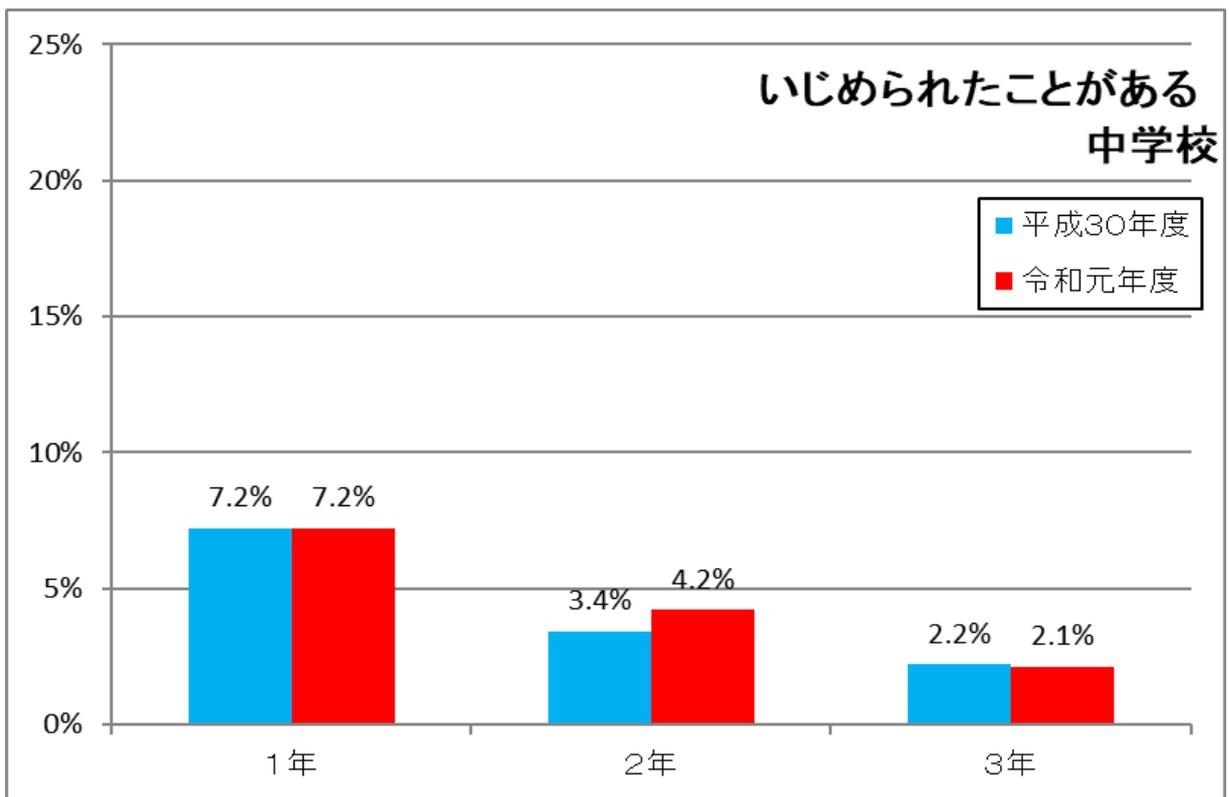
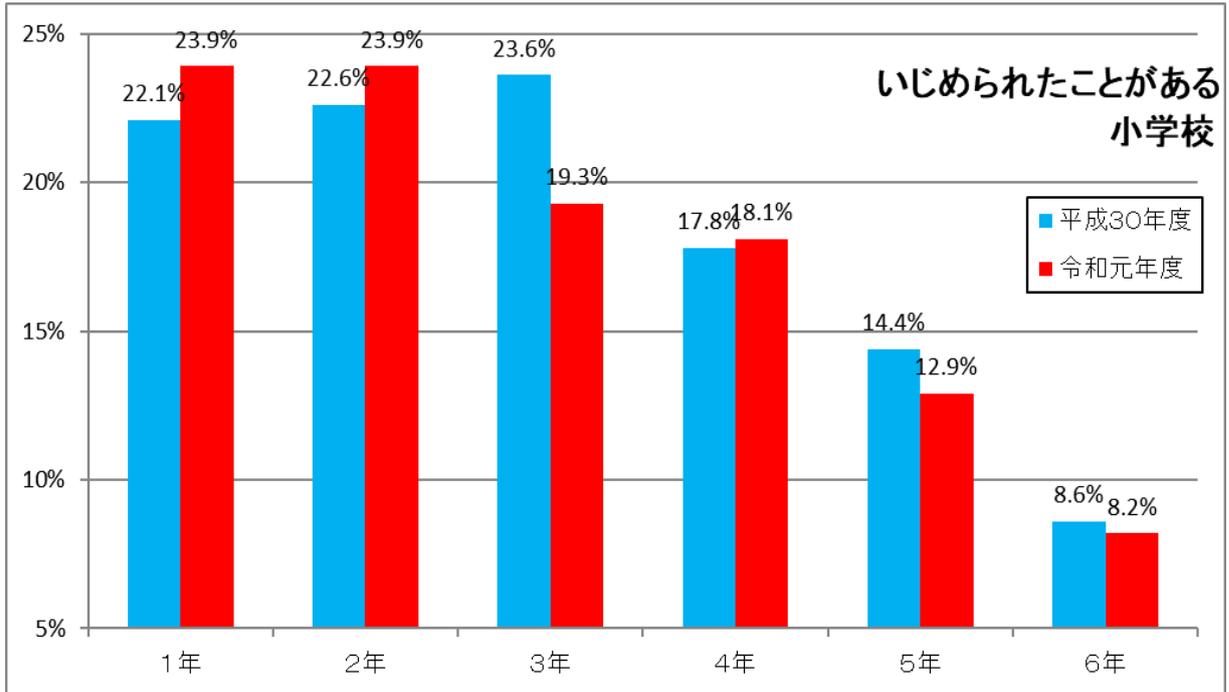
### (4) スポーツや音楽、趣味など、自信のあることや自慢できるものがありますか。



自慢できるものが「ある」、「少しある」と回答した児童生徒の割合は、小学校が82.3%、中学校が79.5%で、小中学校とも昨年度とほぼ同様である。

小学生は心身の成長とともに、得意なことを伸ばしたり、生かしたりする機会が増えることが自己肯定感につながっていると考えられる。中学生になると他者と自分を比較することが多くなり、自己肯定感が低くなると考えられる。

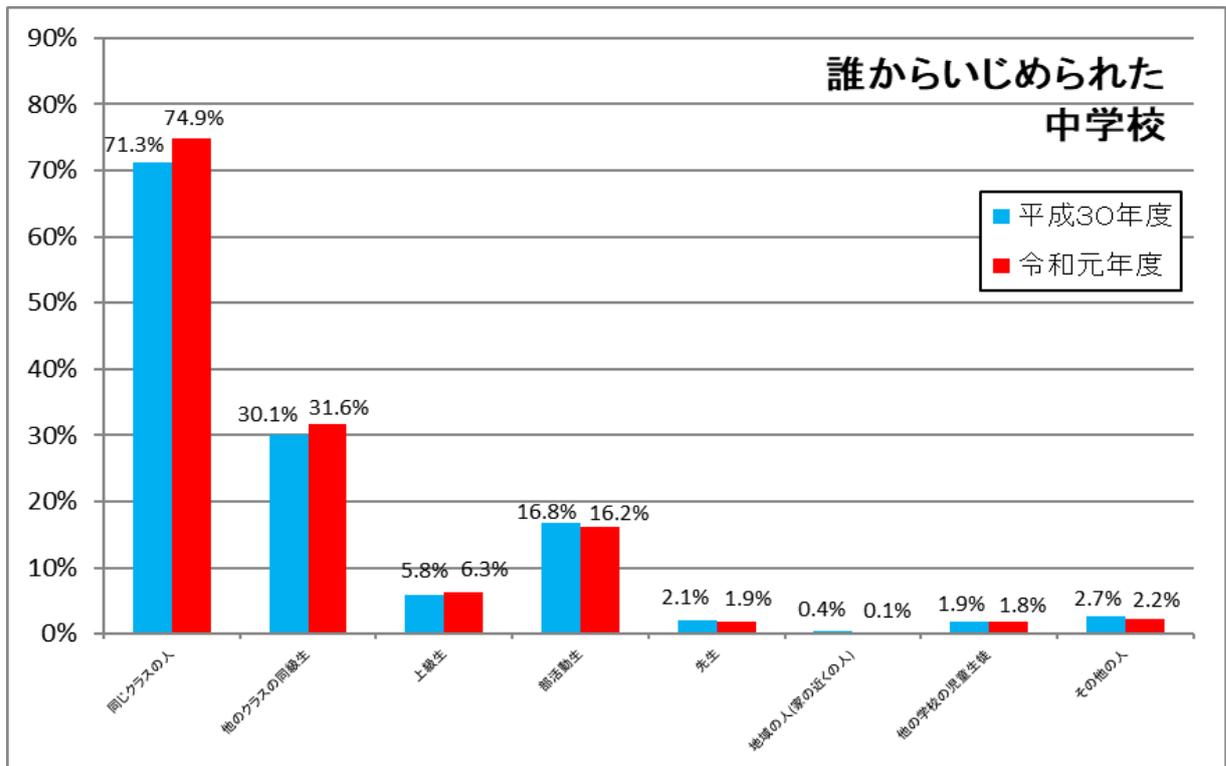
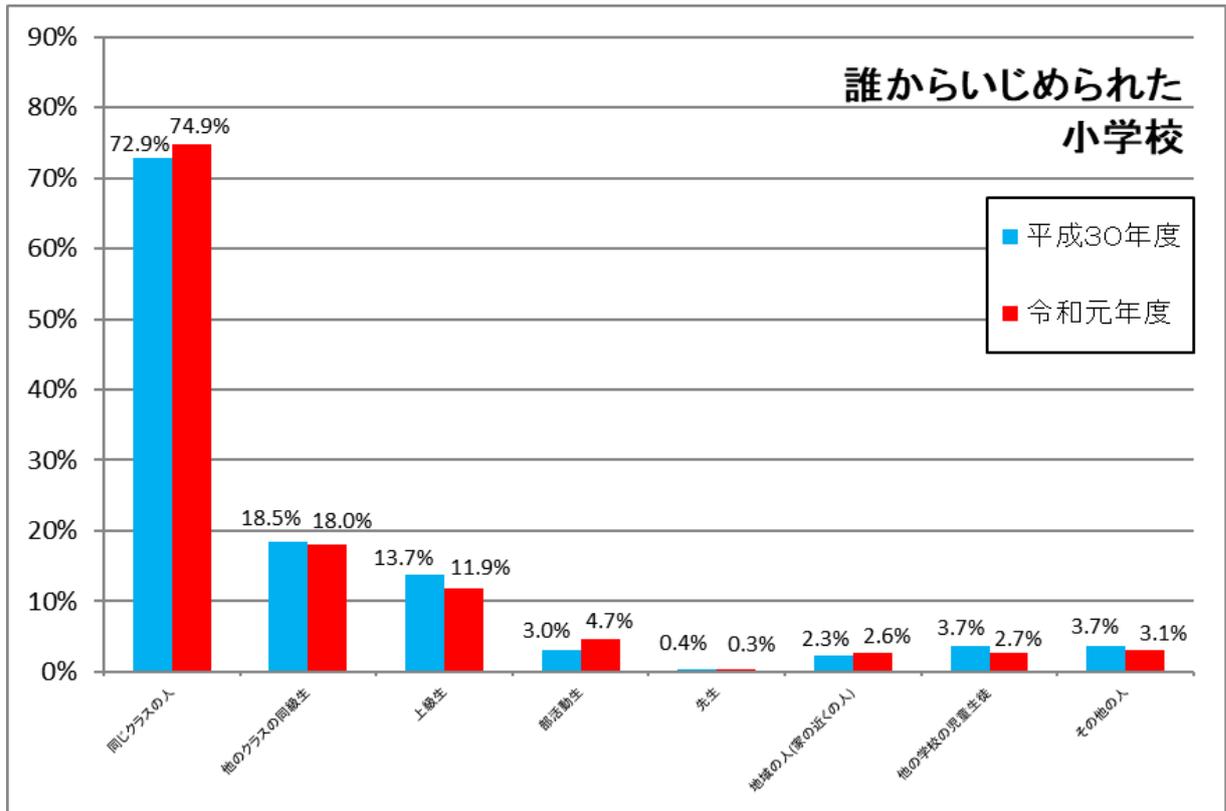
問2 今の学年でいじめられたことがありますか。



「ある」と回答した児童生徒は、小学校が17.7%（H30：18.2%）、中学校が4.5%（H30：4.2%）である。昨年度同様、小学校では1～3年でのいじめの割合が高く、小中学校とも学年が上がるとともに低くなっている。

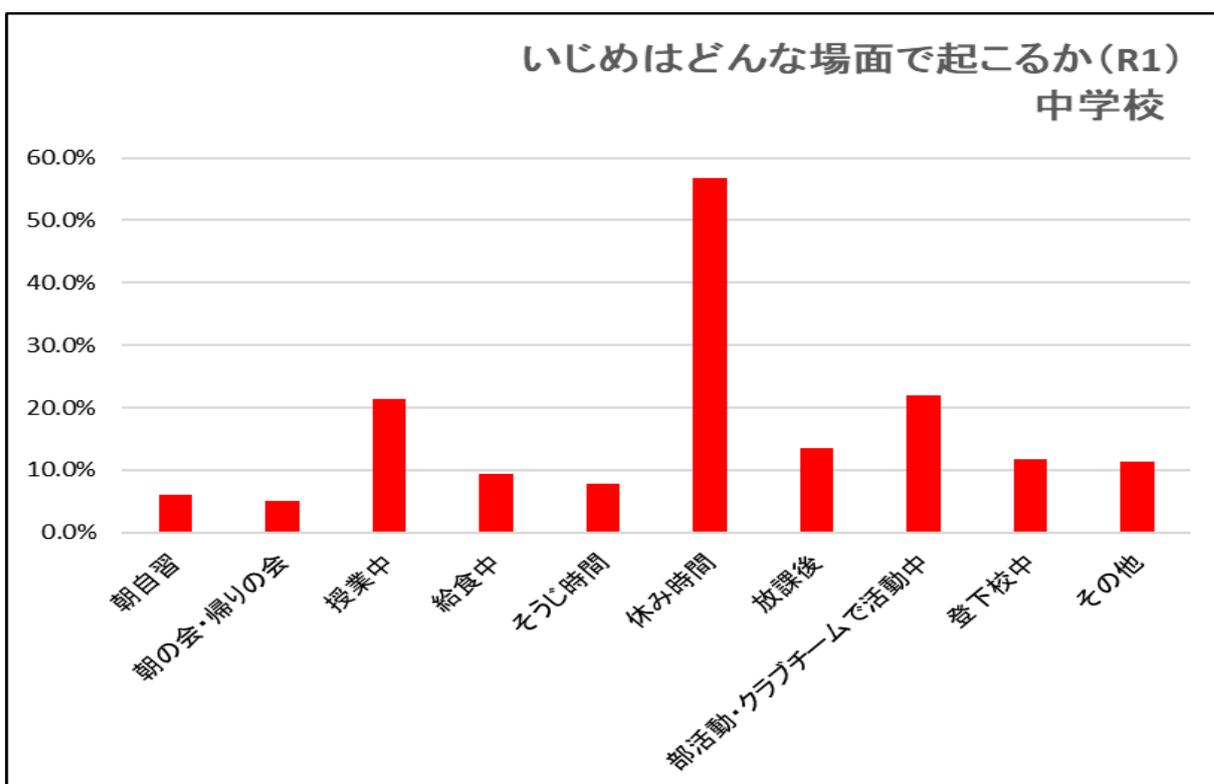
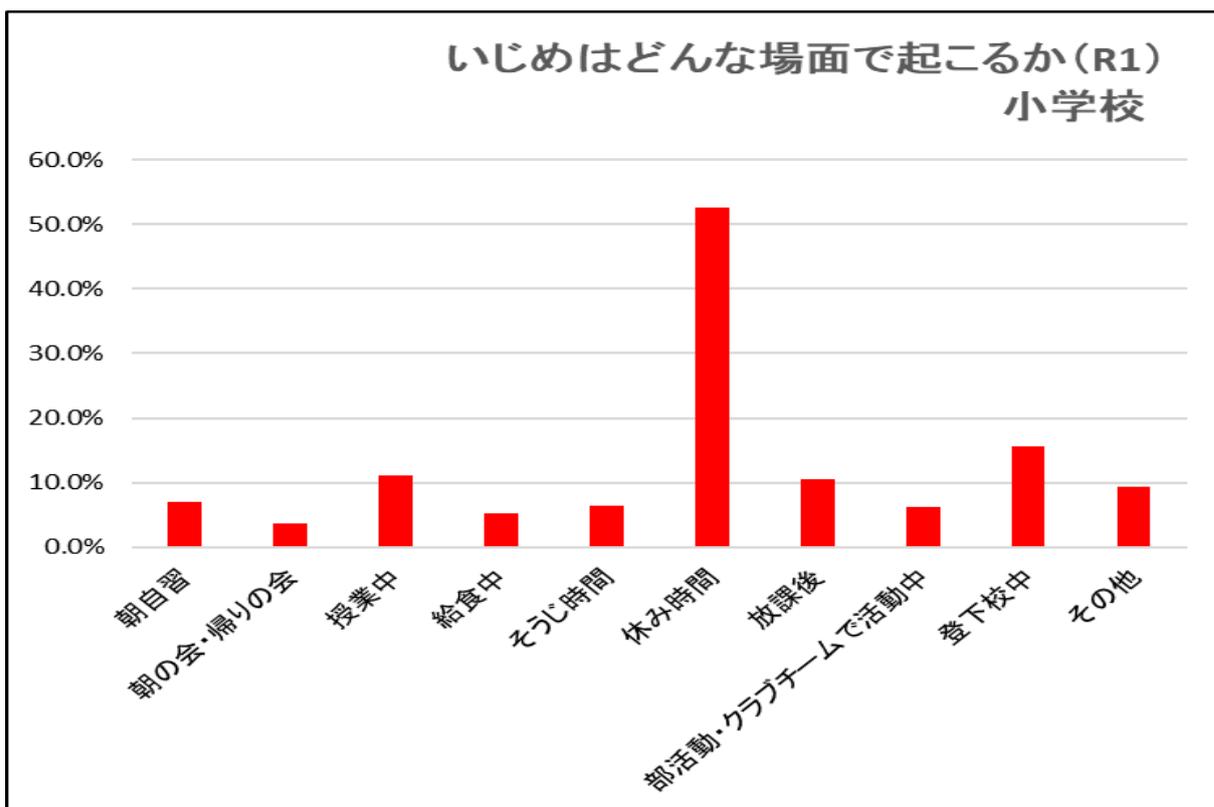
これは、成長に伴ういじめの捉え方や他者との関わり方、集団への属性の変化等が関係しているものと思われる。

問3 誰からいじめられましたか。(複数回答)



小中学校ともに昨年度同様「同じクラスの人」からが約7割以上を占め、次いで「他クラスの同級生」となっている。次に小学校では「上級生」、中学校では「部活動・クラブチームと一緒にしている生徒」となっている。これは、児童生徒の人間関係の広がりや行動範囲の変化が影響しているものと思われる。

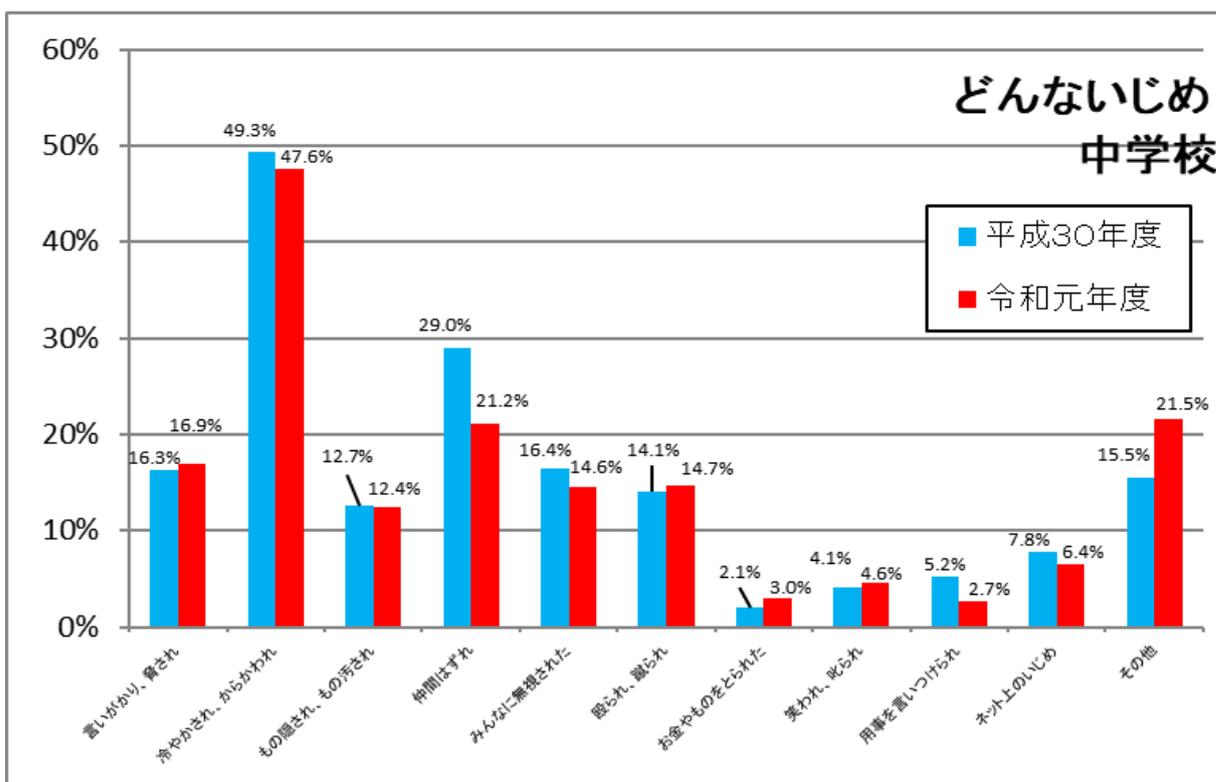
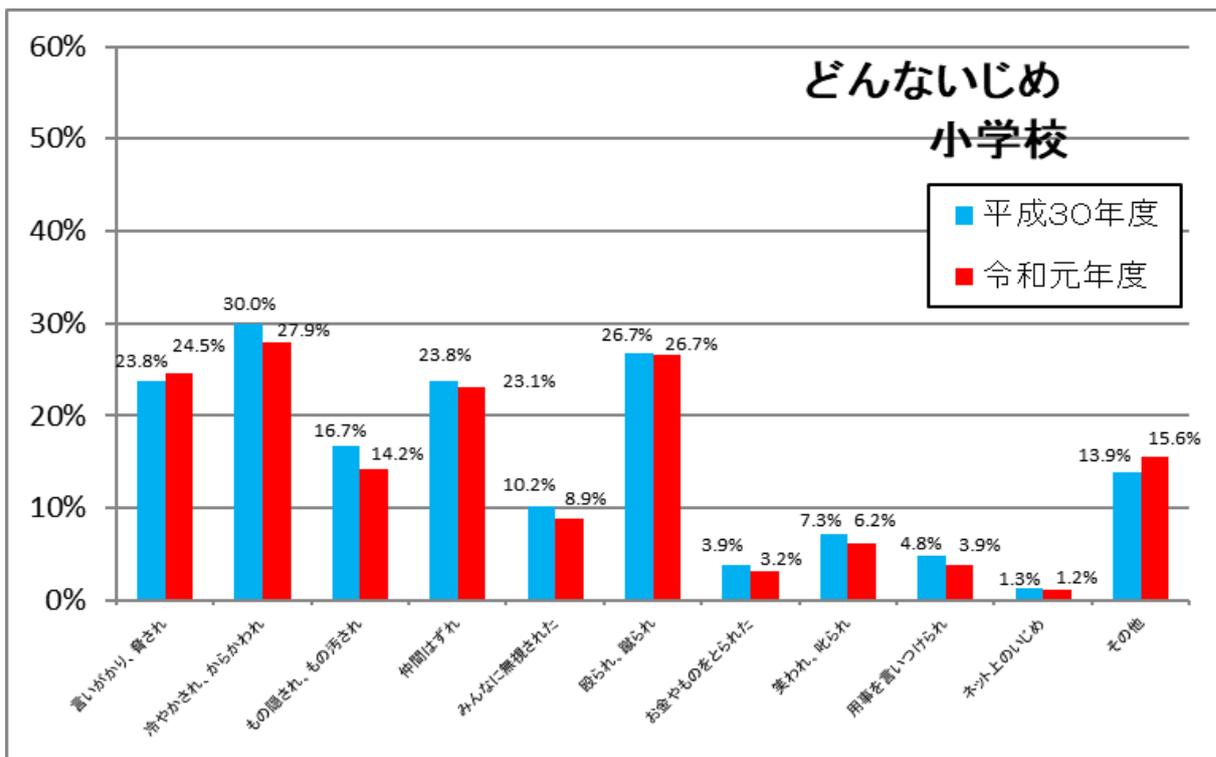
問4 いじめがどのような場面で起こったか。(複数回答可) <新規質問>



小中学校ともに「休み時間」が一番多く、小学校では52.5%、中学校では56.7%となっており、教師の目が届きにくい場面で起こっている。

小学校の「登下校中」や中学校の「部活動・クラブチームでの活動中」も大人や教師の目が届かないところで起こっていると思われる。教師がいる「授業中」「給食中」などは、発言を笑われたり、できなかったことを馬鹿にされたりする等の「冷やか・からかい」を受けたことがいじめの要因と思われる。

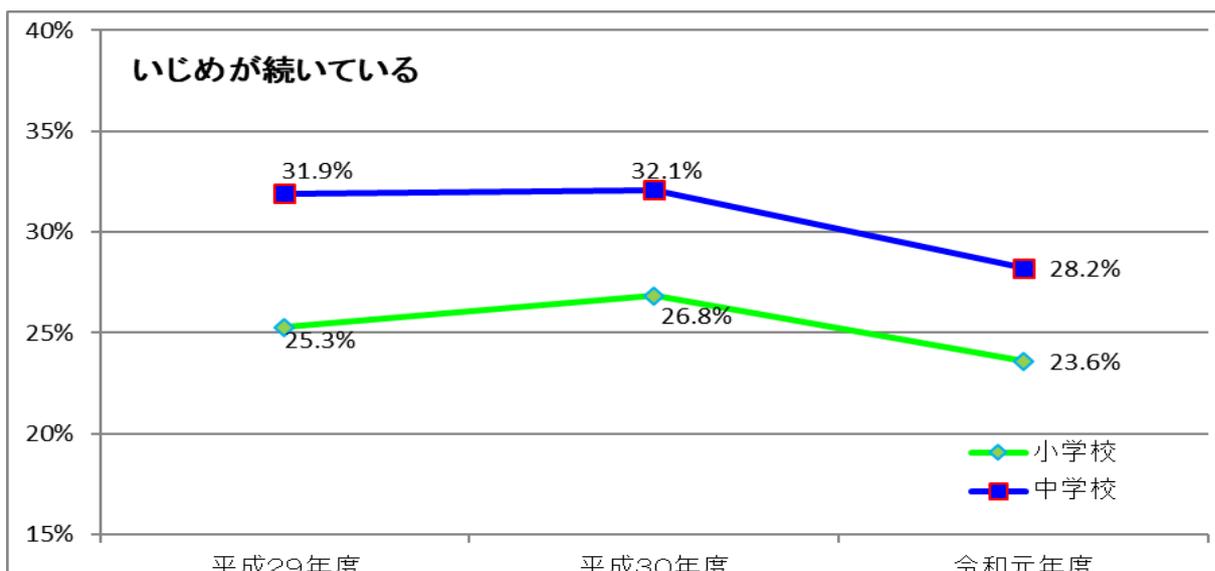
問5 どんないじめを受けましたか。(複数回答)



「冷やかし、からかい」が小学校27.9%、中学校47.6%となっており、昨年度同様に最も多くなっている。「冷やかし、からかい」をしている側は、ふざけの延長と捉えており、友達を傷つけているという意識が薄い。(問13と関連)

また、次に多い「仲間はずれ」については、クラスや同学年における人間関係や仲間意識が十分に築かれていないとも考えられる。

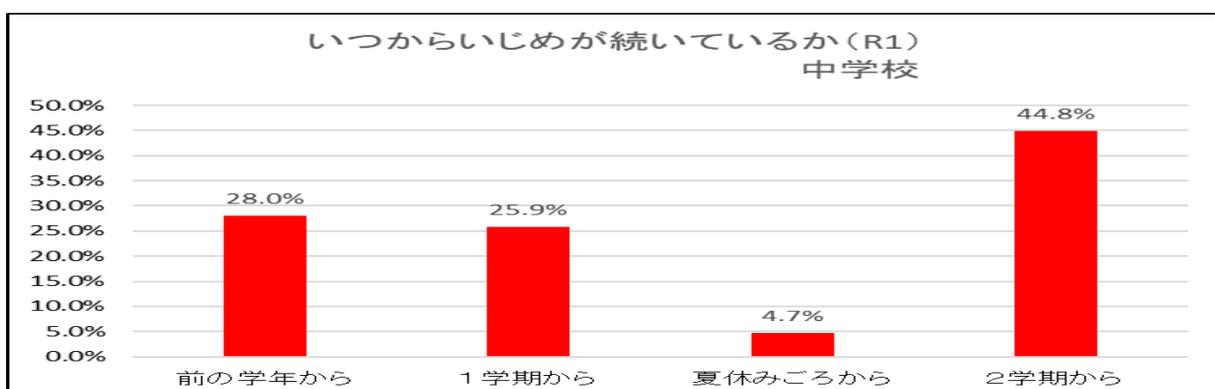
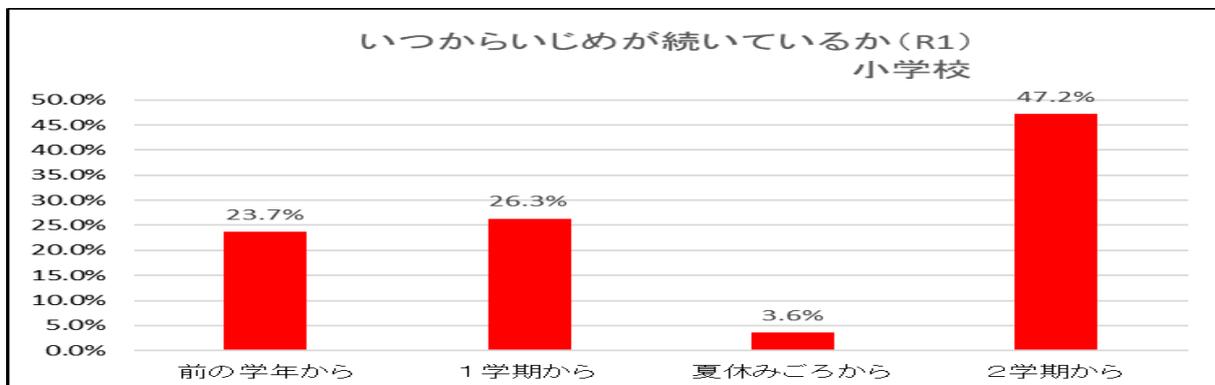
問7 今もいじめは続いていますか。



問2の「今の学年になっていじめられたことがある」と答えた小中学校の児童生徒のうち、24.1% (H30:27.4%) が「今も続いている」と回答した。昨年度と比較すると、小学校では3.9ポイント減少、中学校では3.2ポイント減少した。

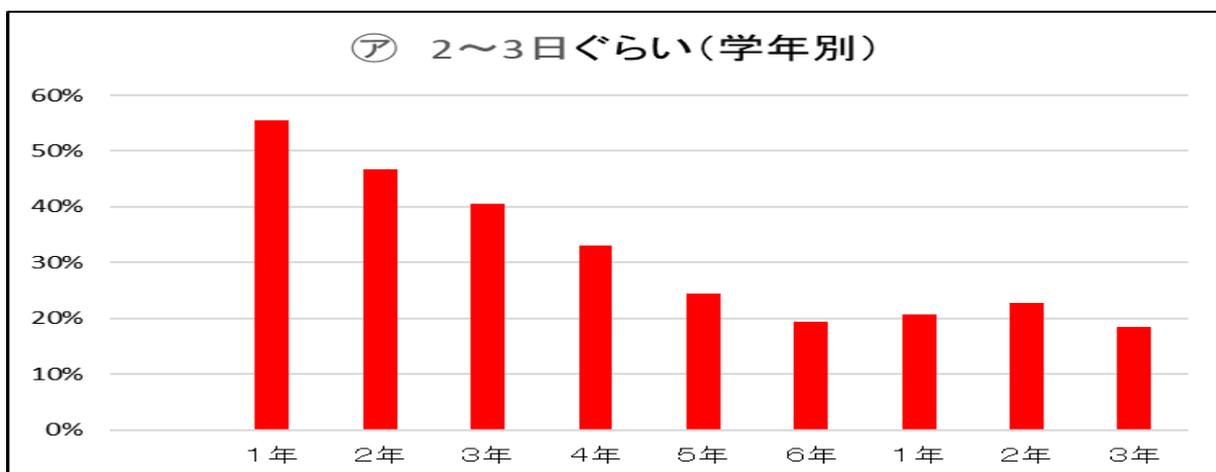
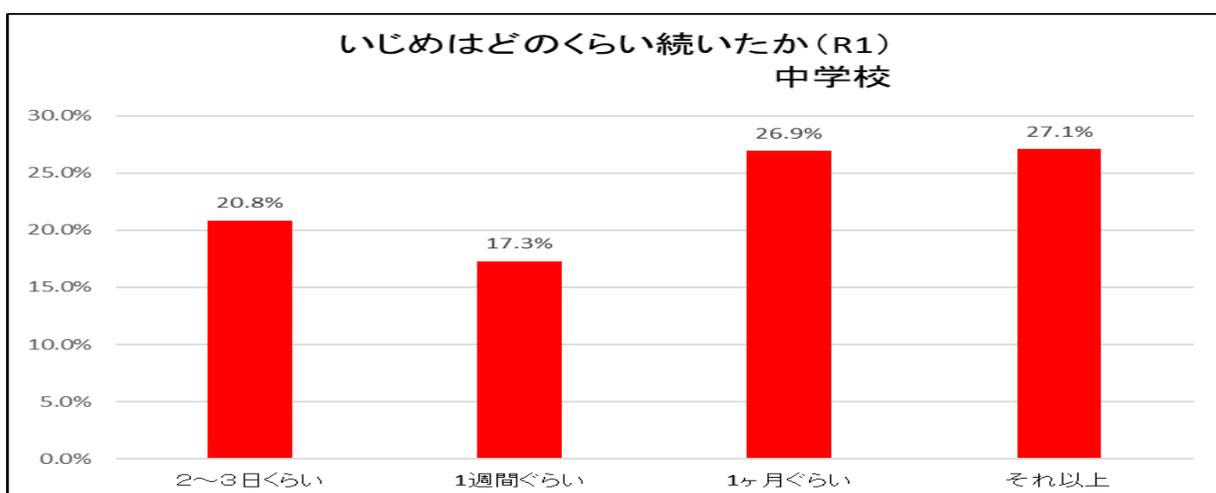
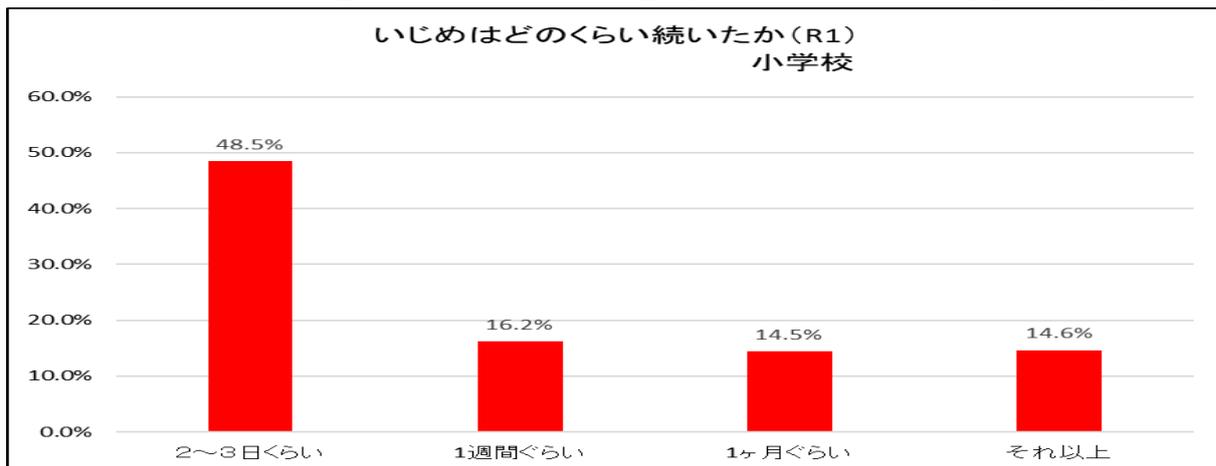
これは、問8の「誰かに話した」という児童生徒が増えたこと、問10「その結果どうなったか」で「いじめはなくなった」という割合が高いことに関連があると思われる。

※ いつから続いていますか。【「いじめが続いている」と答えた児童生徒のみ回答】<新規質問>



「続いている」と回答した児童生徒のうち、小中学校とも半数近くが「2学期から」と回答しているが、「前の学年から」「1学期から」と回答した割合を合わせると小学校は50%、中学校では53.9%となっており、長期間いじめが続いている児童生徒をいかにして把握し、対応するかが課題である。

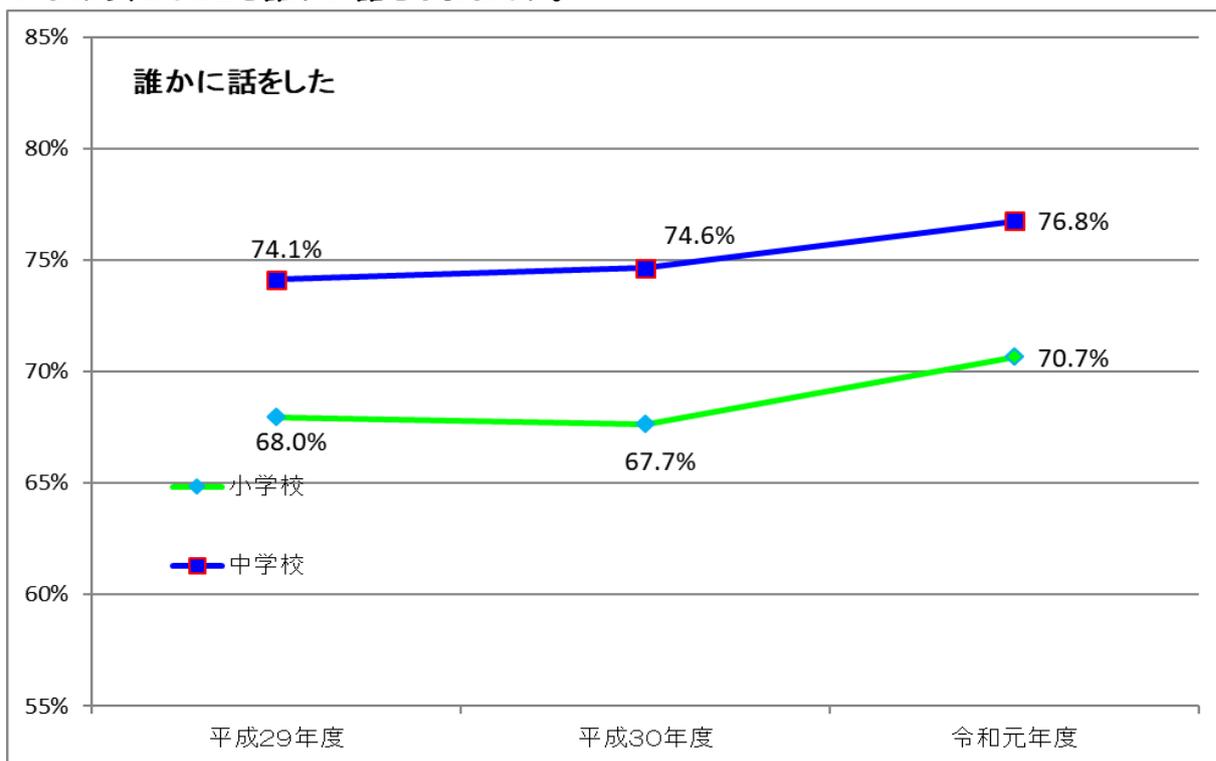
※ どれくらい続けましたか。【「いじめが続いていない」と答えた児童生徒のみ回答】<新規質問>



「続いていない」と回答した児童生徒のうち、いじめが続いた期間が「2~3日くらい」「1週間くらい」と回答した小学生は64.7%であった。中学生は「1ヶ月以上」「それ以上」が54.0%と高く、小学生と中学生で異なる傾向が見られる。「2~3日くらい」続いたと答えた学年別データを見ると、小学校では学年が上がるにつれて減少している。

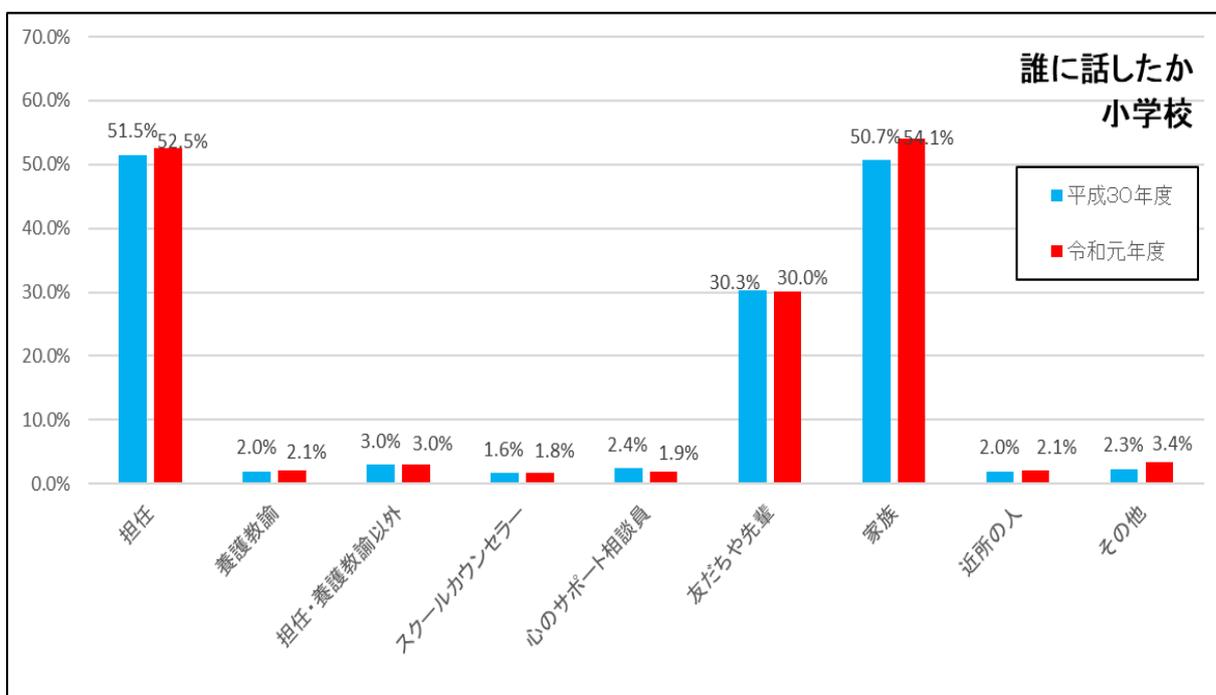
この結果から、学年が上がるにつれて、いじめは長期化していることがわかる。

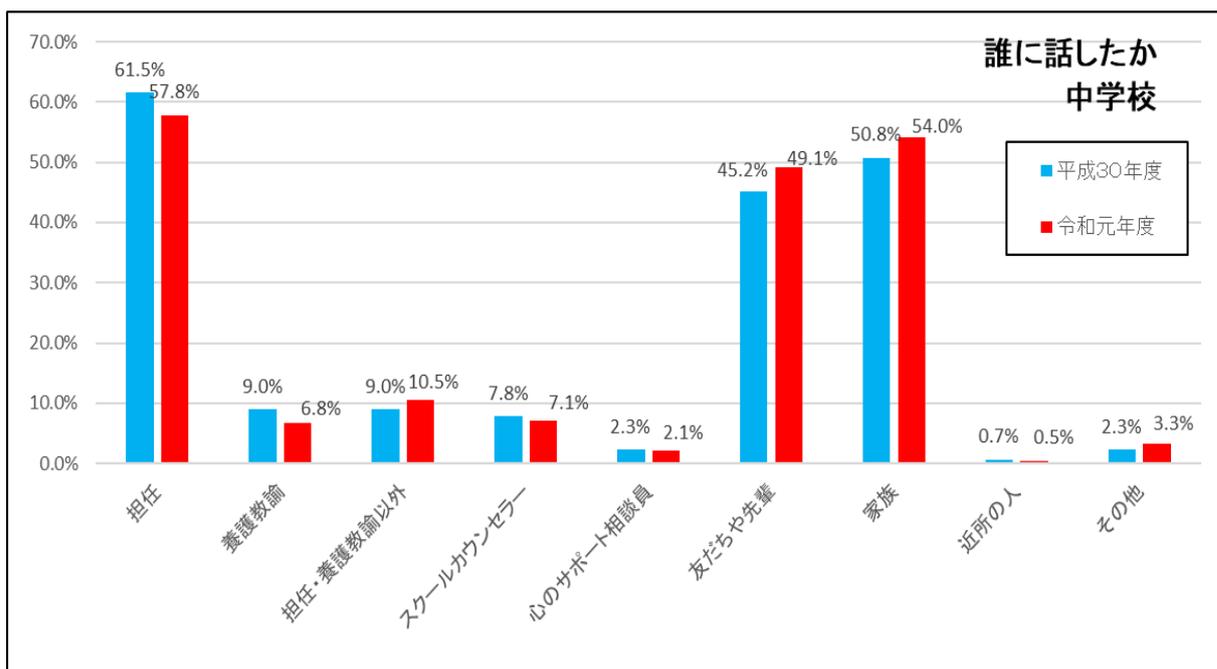
問8 いじめられたことを誰かに話をしましたか。



小中学校ともに7割以上の児童生徒が誰かに話をしており、中学校においては徐々に増加してきている。しかし、今年度も小中学校ともまだ3割近い児童生徒が誰にも相談していない状況となっている。

問9 誰に話をしましたか。(複数回答)

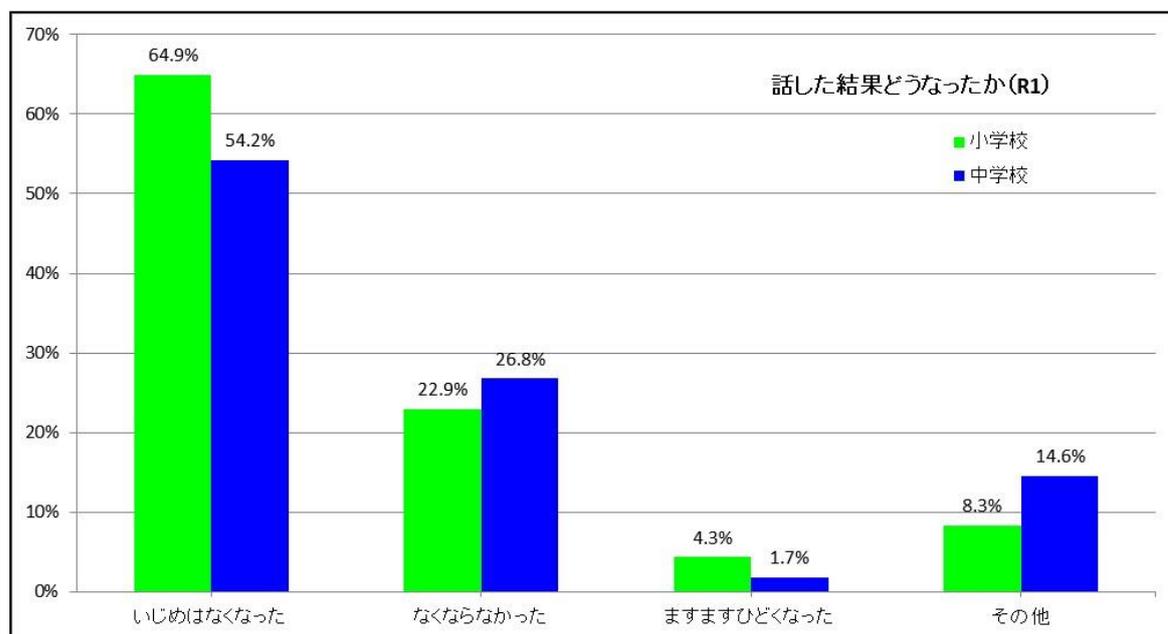




相談相手の上位は、小学校では、「家族」「担任」「友だちや先輩」、中学校では、「担任」「家族」「友だちや先輩」の順となっている。

小中学校ともに相談相手の上位が「担任」となっているのは、児童生徒と担任が日々の「日記」や「生活ノート」でのやり取りを行ったり、教育相談等で担任が相談を受けたりすることが要因と思われる。「その他」の回答例としては、小学校では、「育成クラブの先生」が多く、中学校ではSNS相談「ほっとらいん」をあげている生徒もいた。

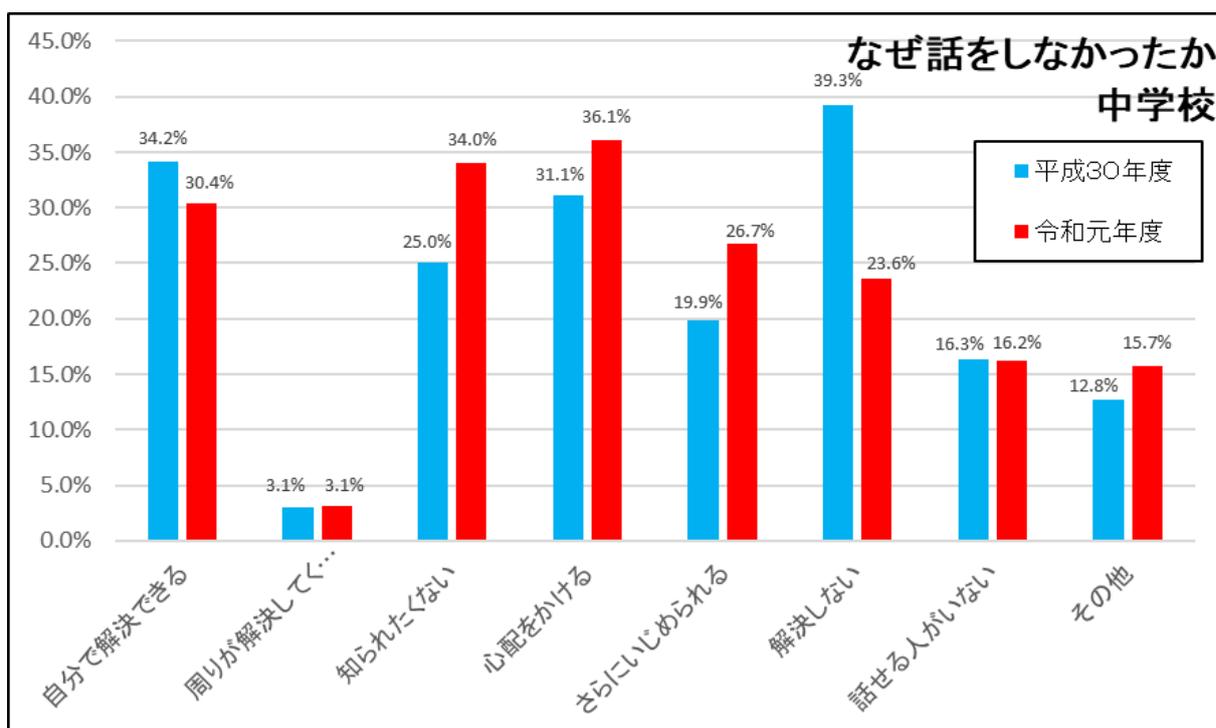
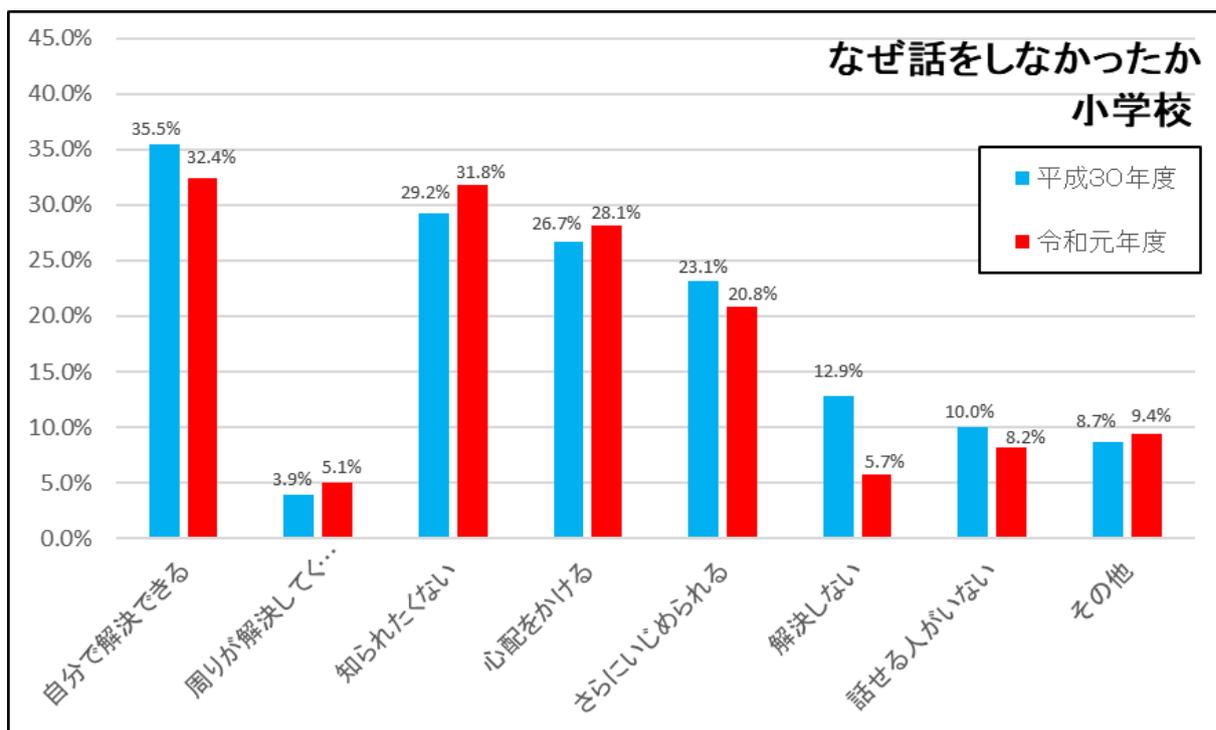
#### 問 10 話した結果どうなりましたか。(新規質問)



「いじめはなくなった」と回答したのは、小学校では64.9%、中学校では54.2%といずれも半数以上を占めている。「なくならなかった」と回答したのは全体の23.3%、「ますますひどくなった」と回答したのは全体の4.1%であった。

話した結果、半数以上が解消へとつながったが、「なくならなかった」「ますますひどくなった」児童生徒も27.4%いることは課題である。

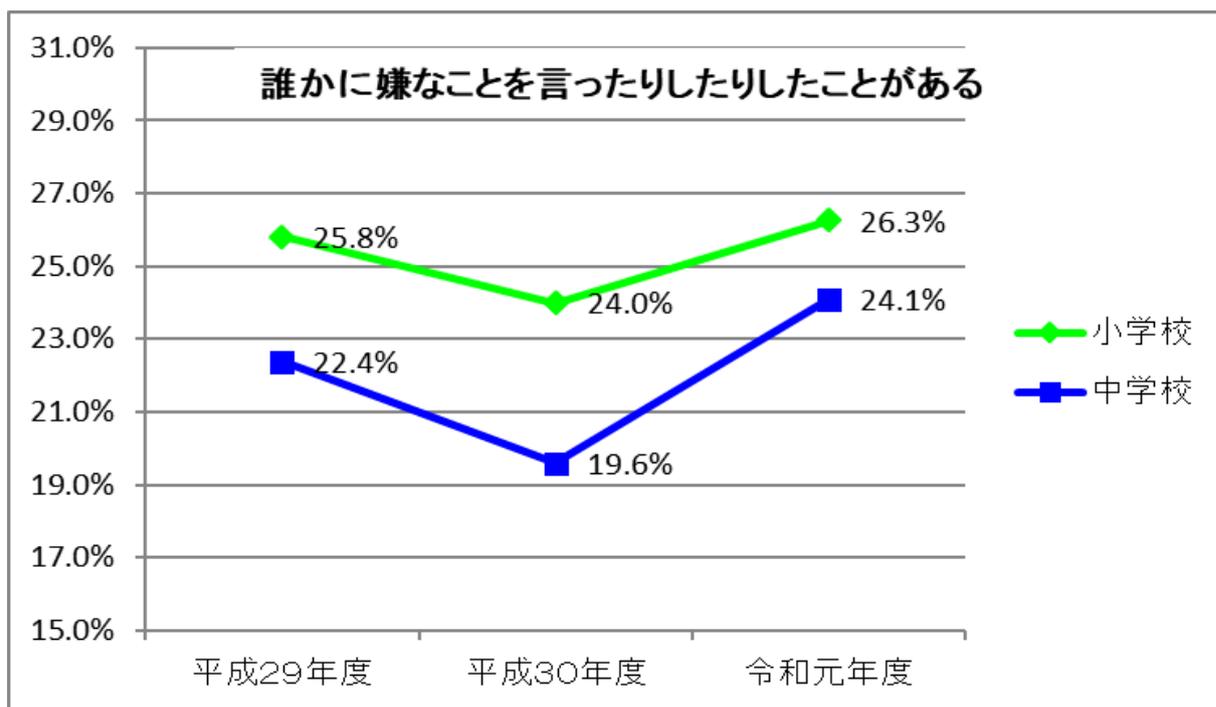
問11 なぜ話をしなかったのですか。(複数回答)



小中学生とも上位は「自分で解決できる」「知られたくない」「心配をかける」となっている。また、「話せる人がいない」と回答した小学生が8.2%、中学生が16.2%にのぼっている。

「誰かに話しても解決しない」の理由には、「何も変わらない(やめてくれない、またやる)」が最も多かった。問10で「話した結果、いじめはなくならなかった」が20%以上あることから、以前話したことがあるが、変わらなかったから「話さなくなった」とも考えられる。

問 12 今の学年になって、誰かにいやなことを言ったり、したりしたことがありますか。

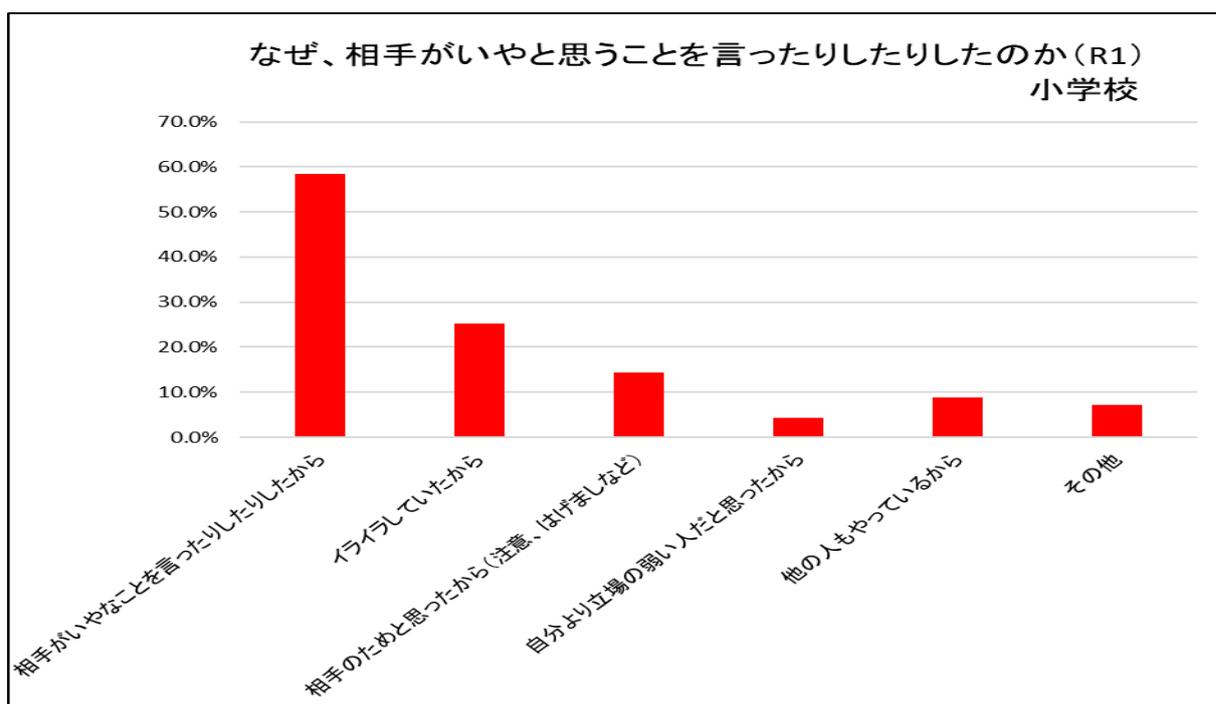


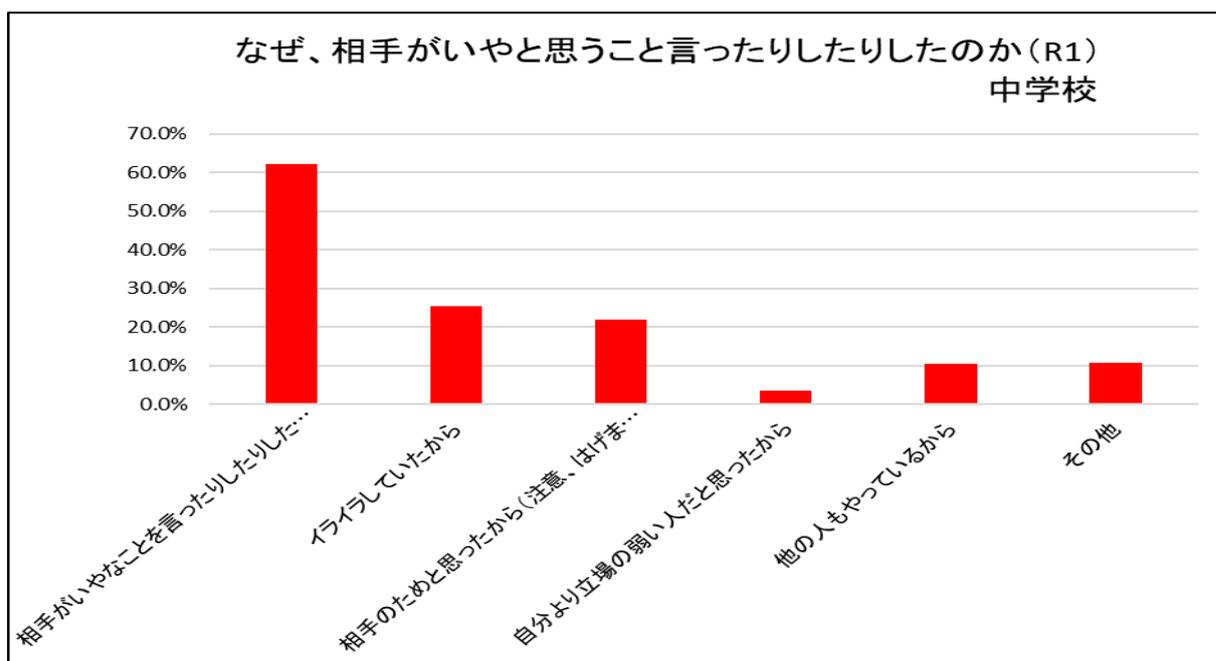
小学生26.3%、中学生24.1%、全体の4人に1人が誰かに嫌なことを言ったり、したりしたことがあると回答した。

問2の「今の学年でいじめられたことがありますか」という問いに対し、「いじめを受けた」と答えた件数が全体的に減少していることから考えると、本設問の回答数の割合が前年度に比べ増加したのは、人を傷つけた言動を認める児童生徒が増えたとも考えられる。

一方で、やってはいけないという意識はあるが、人を傷つけることをしてしまっている児童生徒もおり、今後も学校における教育活動全体を通じた人権教育や道徳教育のさらなる充実を目指す必要性がある。

問 13 なぜ、相手がいやと思うようなことを言ったり、したりしたのですか。<新規質問>



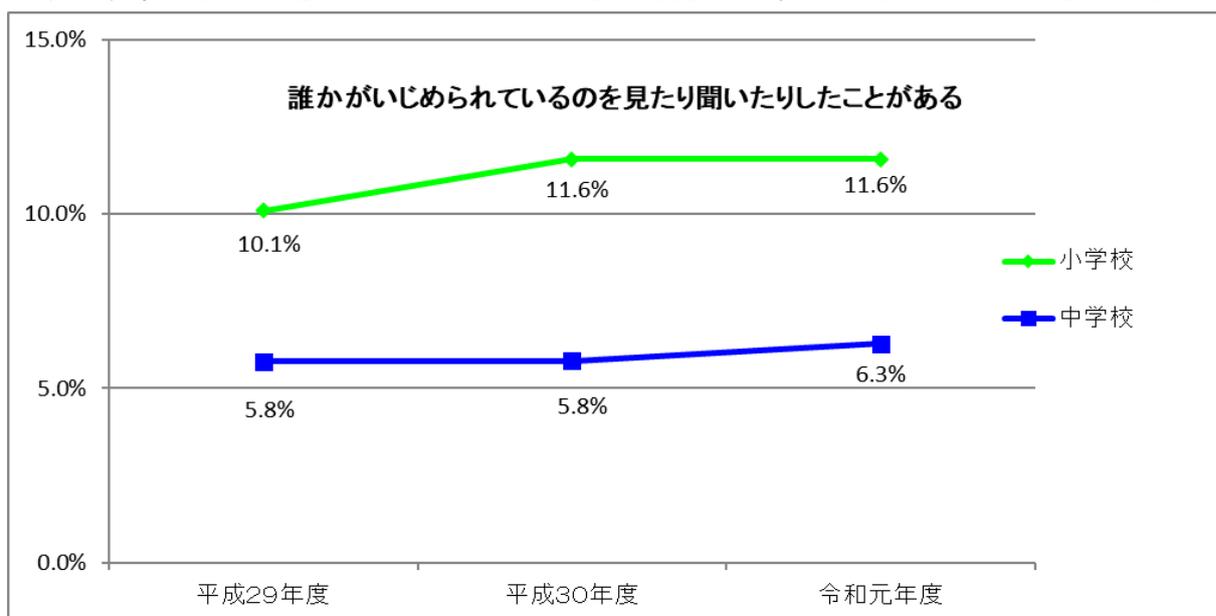


小中学生の約60%が「相手がいやなことを言ったりしたりしたから」と回答し、続いて「イライラしたから」となっている。やられたからやり返したといった思考やイライラの解消ということで人に嫌な言動をしているという傾向が見られる。

また「相手のためを思ったから(注意、励まし)」については、相手に注意や励ましをしたつもりが聞いてくれなかったため、強く言いすぎたり、特定の人物にばかり注意したりしてしまったものと思われる。

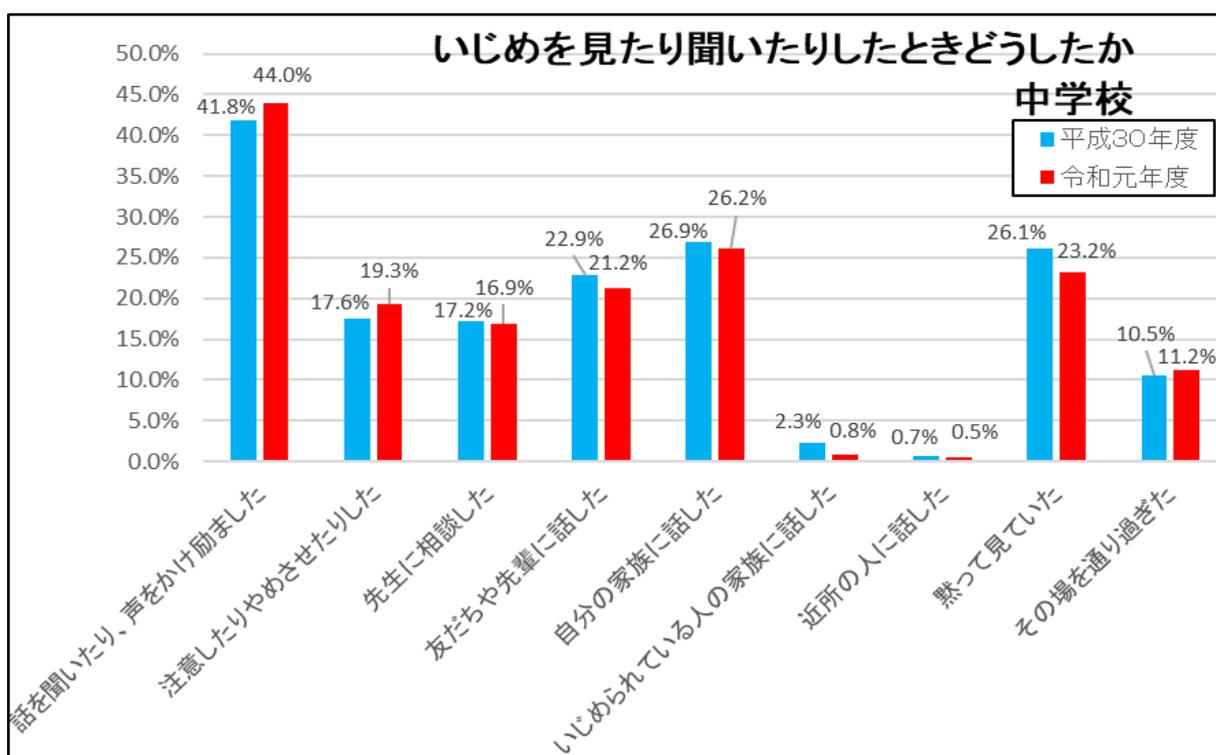
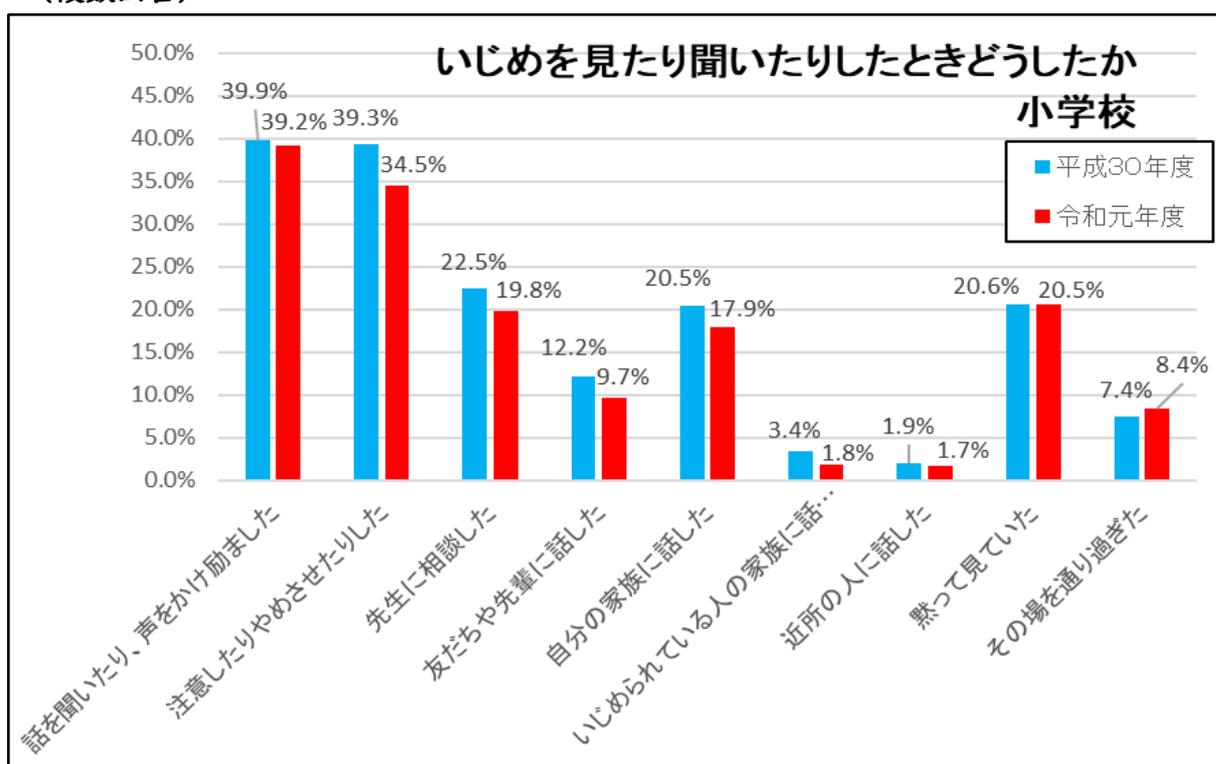
「その他」の回答例としては、「ふざけて(冗談で)」が最も多く、次いで「無意識(ついやってしまった、相手がどう思うかを考えずに言った)」、「からかい(相手の反応が楽しかった)」など、自分本位の理由が多く見られた。

問14 今の学年になって、誰かがいじめられているのを見たり聞いたりしたことがありますか。



小学校では11.6%、中学校では6.3%の児童生徒がいじめられているのを見たり聞いたりしていると回答している。

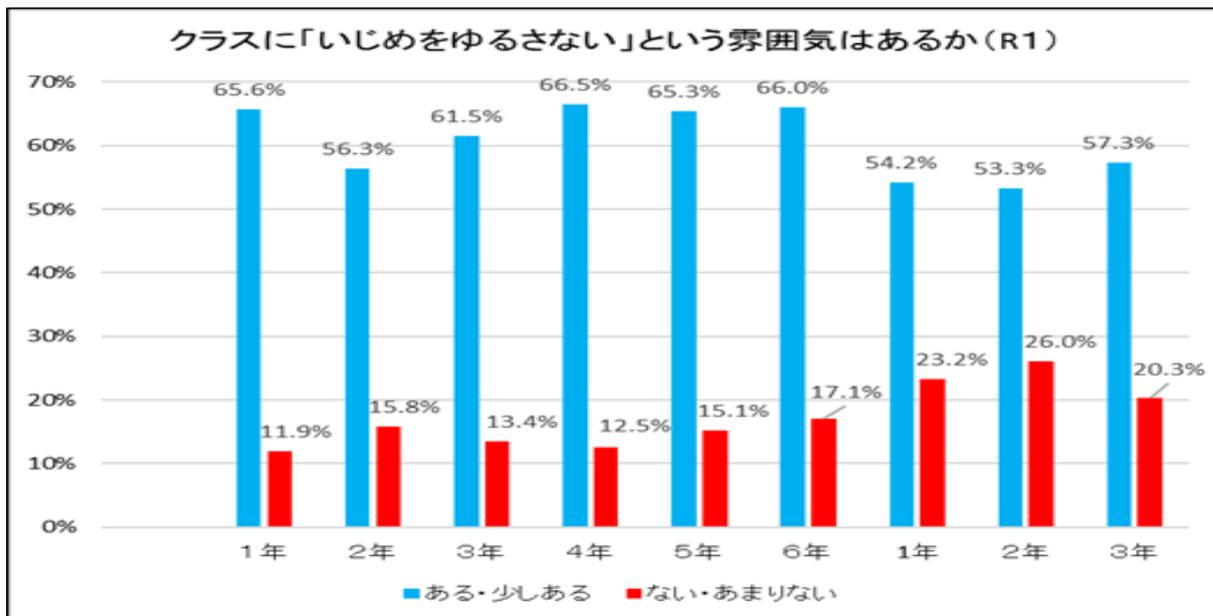
問 15 問 14 で「ある」と回答した児童生徒で、いじめを見たり聞いたりしたとき、どうしましたか。  
(複数回答)



小中学校ともに「話を聞いたり、声をかけ励ましたりした」(小39.2%、中44.8%)が最も多く、次いで小学校は「注意したり、やめさせたりした」(小34.5%)「黙って見ていた」(小20.5%)の順で多く、中学校は「自分の家族に話した」(中26.2%)「黙って見ていた」(中23.2%)の順となっている。

いじめを見たり聞いたりして、前向きな行動を起こした児童生徒は小学生で70%以上、中学生では65%以上であるが、傍観者的な児童生徒の割合も約3割おり、問16との関係が深いと思われる。

問16 あなたのクラスに「いじめをゆるさない」という雰囲気はありますか。



「ある」「少しある」と回答しているのが小学校は63%以上、中学校は約55%であった。「ない」「あまりない」が小学校11%以上、中学校が23%以上となっている。

日頃から、担任により「いじめを許さない学級」の雰囲気づくりをどう行っていくかが課題である。日常の教師の声かけや道徳教育のさらなる充実、また、子どもたちが自分たちで学級のルールづくりを作っていく等の取組が必要である。

問17 あなたはいじめのない学校(学級や部活動・クラブチームなど)にするには、どうすればよいと思いますか。

【小学校】 ○いじめを見て見ぬふりしない。いじめられている人を放置せず、寄り添い、先生にも言う。

○みんながルールを守り、学級の目標を大切に。クラスでルールをつくる。

○お互いの何が嫌で何をしてほしいという思いを考える。何かあったら、とことん話し合う。みんなと話せる時間を作る。

○まず自分がいじめない。人を笑わない。人が嫌がることをしない。

○いじめを受けたら早めに相談する。相談しやすい体制をつくる。

○いじめをしないイベントを考える。クラスレクリエーション(遊び)をする。

○人権宣言を意識して行動する。いじめ根絶宣言をする。個性を尊重し合う。人の個性を悪く言わない。友達のよさを伝えあう。

【中学校】 ○いじめを許さない雰囲気をつくる。(いじめることが恥ずかしい・注意し合える・いじったりすることを許さない など)

○正直でいられる(自分の思いを相手に直接言い合える)学級をつくる。

○人が嫌がることをしない。(相手の気持ちを考えて気遣いをする。)相手の気持ちを考える。(自分の価値観を相手に押し付けない。)

○だれかに相談できるようにする。(先生・友達など)

○困っている友達がいたら声をかける。

○個性を尊重し、認め合う。相手のことをよく知る。いいところを見る。

○クラスで問題が起こったら、ルール等をクラスで話し合う。いじめについてみんなで考え、話し合う時間を作る。

- いじめをされたらどんな気持ちになるかの疑似体験授業があるとよい。
- 匿名でいじめを通報できるシステム(メールやラインのアドレスなど)をつくる
- 教師がしっかり怒る(怒ってくれない先生が多い)
- 悩みを持つ生徒からの相談を待つのではなく、少しでも異変を感じたら先生から声をかけてほしい。
- いじめられている生徒だけでなく、いじめている生徒もカウンセリングを受ける。

#### 【アンケートの実施回数】

本アンケートも含めて、学校全体の取組として、いじめの実態把握のためのアンケートは全小中学校において年間10回以上実施している。

### 5 アンケート結果からみえた課題と今後の取組

#### (1) 自己肯定感や自己有用感を高める。

学校生活の満足度については、小学校より中学校の割合が低下する傾向がある。生徒指導の三機能を生かした学級づくりを基盤として、ICTの効果的な活用を工夫し、教師主導の「教えたい」授業から子ども主体の「学びたい」授業への改革に取り組むことで、自己肯定感や自己有用感を高めていく。

#### (2) 低学年における自他を認める丁寧な指導を行う。

「今の学年になっていじめられたことがある」と回答した割合は、小中学校とも低学年の割合が高くなっている。学年の実態に応じて、自他を認める丁寧な指導を行っていく。

#### (3) いじめをなくしていこうとする雰囲気高める。

いじめは、大人や教師の目が届きにくい場面で起こっている。このことに対応するには、いじめを見たり聞いたりして、前向きな行動を起こす子どもを増やすことや「いじめを許さない学級」の雰囲気づくりが必要である。毎月実施する絆アンケートの結果等を子どもが主体となって分析し、自ら対応策を考える場面を作っていくことで、いじめをなくしていこうとする雰囲気を高めていく。

#### (4) 相談しやすい環境づくり及び子どもの思いに応える体制づくりを図る。

「いじめられたことを誰かに話しましたか」という質問に対し、話をしていないと回答した子どもが約3割弱いた。今回の調査で、小学校では「育成クラブの先生」に相談したり、中学校ではSNS相談「ほっとらいん」に相談したりしている実態も分かった。今後も、子どもの身近に相談できる相手を増やしたり、相談できるツールを構築したりしていく。また、教師と子どもの話しやすい関係づくりや子ども同士何でも言い合える仲間づくりに取り組んでいく。

#### (5) 相談することの大切さを実感させ、自らSOSを出すことの教育を図る。

誰にも相談しなかった理由として、6~7割の子どもが「知られたくない」「心配をかける」と回答しており、自分で問題を抱え込む傾向が高い。また、小中学校ともに2割程度が「さらにいじめられる」と回答するなど、相談しても解決には結びつかないと考えている子どもがいる。各学校における教育相談等が出てきた子どもの悩みや課題に教師が真剣に関わることで、相談したことでの成功体験を増やし、自らSOSが出せる子どもを育てる。

#### (6) 相手の立場に立って考える心や態度を育む。

昨年度と同様にいじめの態様は「冷やかし、からかい」が最も多かった。「冷やかし、からかい」をしている側は、ふざけの延長と捉えており、友だちを傷つけているという意識が薄い。道徳科や特別活動の授業等を中心に相手の立場に立って考える心や態度の育成を図る。